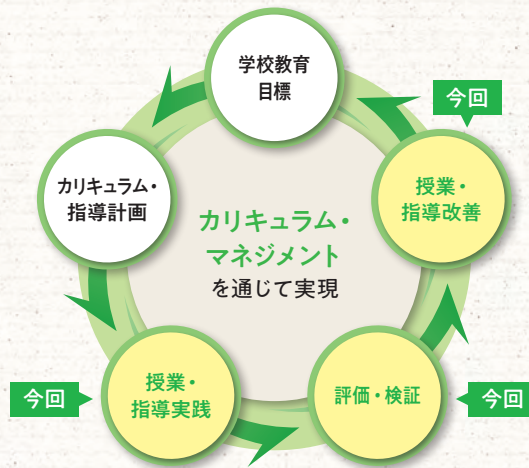


学校生活の場面ごとに行動目標を設け、 その達成状況をデータで示すことで 自己肯定感を高め、前向きな行動を促す

宮崎県立高鍋農業高校



◎校訓は「研学修技」「勤労興産」「礼節敬愛」「感恩報謝」。旧高鍋藩の舞鶴城跡にあり、藩校「明倫堂」の教えを引き継ぐ。実習農場は、大規模農家を想定した規模と設備を備える。2017年度、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）」の指定を受け、専門性の高い人材育成に取り組む。



◎設立 1903（明治36）年

◎形態 全日制／園芸科学科・畜産科学科・食品科学科・フードビジネス科／共学

◎生徒数 1学年約110人

◎2020年度進路実績（現役のみ） 4年制大は、別府大、南九州大、宮崎産業経営大などに5人が合格。農業大学校進学23人。短大、専門学校進学35人。就職63人。

◎URL <http://www.takanabe-ah.ed.jp/>

生徒を褒めて前向きにし、
学校の雰囲気をよくしたい

宮崎県立高鍋農業高校は、地域の農業を支える人材の育成を担ってきた伝統校だ。だが、農業就業人口の減少を背景に定員割れが生じ、生徒の学力の多層化などが起きていた。そのような課題を抱えていた同校は、2018年度、宮崎県教育委員会「高等学校における『通級による指導』」の拠点校となったことをきっかけに学校改革に踏み出した。

教育相談部の市原洋平先生は、通級による指導を、特別な指導を限定的な場で行う個別支援にとどめず、学校全体の指導改善に結びつけられると考え、宮崎大学教育学部の半田健講師に相談。半田講師からは、行動目標を提示した上で、その達成に向けた指導を行い、望ましい行動を見せた生徒を認めるといふ、学校全体で取り組むポジティブな行動支援「スクールワイドPPBS（Positive Behavior Support）」を紹介された。

「当時の生徒には、学習や生活の面で課題が見られ、退学者も少なくありませんでした。多くの教師が問題意識を持ちつつも、指導の足並み

がそろっていなかったため、指導の目標を共有し、教師が生徒のよさを積極的に褒める取り組みを行うことで、学校全体に前向きな雰囲気を醸成したいと考えました」

「スクールワイドPPBS」が通級による指導をしやすくすると考えたことも、導入の大きな理由だ。

「目標とする資質・能力の育成につながる望ましい行動を明確にし、まず、全体を対象とした支援体制を構築することで、個別の支援の方が有効な生徒が浮かび上がるといった流れを想定しました。『スクールワイドPPBS』の延長線上に『通級による指導』を位置づければ、対象者が周囲から特別視されることもなく、支援を受けやすくなります。また、教室を始めとした日常生活の場で、個別の支援で学んだ内容が生かしやすくなると考えました」（市原先生）

市原先生は、新たな取り組みを職員会議で提案。全教師の賛同が得られたため、導入準備を始めた。

資質・能力の育成の3つの
観点から行動目標を設定

まずは、18年11月に全教師を対象



SPH 研究部
横田 雅人
よこた・まさひと
教職歴11年。同校に赴任して
3年目。農業・畜産科。



教育相談部
市原 洋平
いちばら・ようへい
教職歴19年。同校に赴任して
9年目。地理歴史・公民科。



校長
奥平 博徳
おくひら・ひろのり
教職歴33年。同校に赴任して
1年目。

に、生徒に身につけさせたい資質・能力を調査。教育相談部は、その結果を基に、育成を目指す資質・能力を、「じぶんを育てよう(自分の内面、行動など)」「なかまになろう(他者への尊敬、親しみなど)」「まなびに親しまおう(教養、情報活用、表現力など)」の3観点に整理した。ポイントは、育成を目指す資質・能力を「○○力」と定義するだけにとどめず、具体的な「行動」にまで落とし込んだことだ。それにより、生徒が何をすればよいか理解できるようにした。そして、最も多くの教師が身につけさせたい資質・能力に挙げた「コミュニケーション能力」を校訓の「礼節敬愛」の一要素と位置づけ、

図1 「礼節敬愛の取り組み」行動目標(抜粋)

◎ 2019年度

	じぶんを育てよう	なかまになろう	まなびに親しまおう
教室授業	<ul style="list-style-type: none"> 高農の授業を全部好きになろう 先生の話をも素直に聞く姿勢を持とう 	<ul style="list-style-type: none"> 思いやりのある言葉と行動で、よい授業の雰囲気をつくらう 教え合いで、互いに理解を深めよう 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の教材を大切に管理しよう(教科書・ノート・ファイル等) 得意分野をより高レベルに伸ばそう
実習	<ul style="list-style-type: none"> 新しいこと・苦手なことにも「挑戦」をしよう 実習の中で「気づき」を持とう 	<ul style="list-style-type: none"> 力を合わせる→作業効率が高くなる→楽しくなる!を実感しよう 先生の「最初の説明」 	<ul style="list-style-type: none"> 実習で使う道具・施設を大切に扱おう 分からないことは、その場で聞こう

◎ 2020年度

	じぶんを育てよう	なかまになろう	まなびに親しまおう
授業	<ul style="list-style-type: none"> 礼儀正しい挨拶と敬語を心がけよう 授業中「気づいたこと」や「疑問」には積極的に質問しよう 	<ul style="list-style-type: none"> 授業のルールを守り、落ち着いた雰囲気を作らう 協力する→学習効率が高くなる→楽しくなる!を実感しよう 	<ul style="list-style-type: none"> 得意分野をより伸ばし、苦手分野には「挑戦」をしよう 教材・道具・施設を大切に使う
そうじ	<ul style="list-style-type: none"> 段取りを確認し、自分から進んで取り組もう 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの担当場所に責任を持ち、協力してキレイにしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 「ゴミを減らす」「汚さない」で学びの環境を守らう
集会	<ul style="list-style-type: none"> 顔を上げ、話している人を見よう 	<ul style="list-style-type: none"> 遅刻・私語といったマナー違反を注意し合える仲間になろう 	<ul style="list-style-type: none"> ポートフォリオに記録を残そう

2019年度は、「教室授業」「実習」「休み時間」「そうじ」「集会」「寮」の6場面を設定していたが、20年度は、「授業」「そうじ」「集会」の3場面に精選した。

*学校資料を基に編集部で作成。

図2 「礼節敬愛の取り組み」行動評価表(抜粋)

	じぶんを育てよう	なかまになろう	まなびに親しまおう
授業	<ul style="list-style-type: none"> 職員アンケート 礼法キャンペーン 容儀検査 	<ul style="list-style-type: none"> 遅刻・早退数 いじめアンケート 社会スキルアンケート 提出物状況 授業・実習中のケガによる保健室入室 授業中の指導回数 	<ul style="list-style-type: none"> 資格取得数 定期考査 基礎力診断テスト伸び率
	<ul style="list-style-type: none"> SPHアンケート 基礎力診断テスト(*1) 	<ul style="list-style-type: none"> SPHアンケート いじめアンケート 	<ul style="list-style-type: none"> SPHアンケート 学習環境調査

SPHアンケートは、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」に関連した意識調査のこと。社会スキルアンケートは、P.36 図3を参照。

*学校資料を基に編集部で作成。

「礼節敬愛の取り組み」と名づけた。次に、全教師参加のワークショップで、3観点ごとに学校生活の各場面での望ましい行動、すなわち、行動目標を検討した。各目標は、生徒の力を信じ、達成のハードルが高いレベルに設定。各目標の達成状況の評価方法は、新たな取り組みを導入するのではなく、既に行っている遅刻・早退数などの調査から設定し、教師の負担が増えないようにした。最終的には、「教室授業」「実習」「休み時間」などの6場面の行動目標を

示した「礼節敬愛の取り組み」(図1)と、各目標の評価方法を示す「行動評価表」(図2)を作成。19年度の新入生から適用することにした。ところが、市原先生が在校生にその計画を伝えたところ、「取り組みはよいけれど、うまくいかないと思う」という意見が出された。「その生徒には、『1年生は先輩の行動を参考にするから、2・3年生が変わらなと浸透しない』と言われました。確かにその通りだと思います。そこで、18年度の3学期、翌

年度に新1年生の先輩となる1・2年生に、「集会」の場面で指導を実施することにしました(市原先生) 集会の度に、クラス全員が集合するまでの時間を測ってその結果を伝えたり、教師が整列の指導をしたりすると、驚くほどの効果が表れた。「以前は遅刻者が多く、雑然としていましたが、指導を繰り返すうちに、生徒は開始時刻までに集まり、静かに整列するようになりました。この状況は現在も続いています。そうした生徒の姿から、粘り強く指導

*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

図3 社会スキルアンケートの質問項目(抜粋)

- 1 困っている友だちを助けてあげる。
- 2 友だちの話を面白そうに聞く。
- 3 自分に親切にしてくれる友だちには親切にしてあげる。
- 4 友だちに話しかけられない。
- 5 友だちを脅かしたり、友だちに威張ったりする。
- 6 友だちが失敗したら、励ましてあげる。
- 7 友だちの頼みを聞く。
- 8 自分から友だちの仲間に入れない。
- 9 何でも友だちのせいにする。
- 10 友だちのけんかをうまくやめさせる。

全部で25項目。回答は、「全然あてはまらない」から「よくあてはまる」の4段階で行う。*学校資料を基に編集部で作成。

19年度が始まると、新入生に向けて「礼節敬愛の取り組み」を実践した。教師は、集会やクラスで取り組みの目的や目標達成を目指してすべきことなどを繰り返し説明するとともに、生徒が目標に応じた行動を起こせるよう環境も整えた。

その1つが、行動目標に関連する講演やワークショップを実施し、生徒の変容を促すことを目的とした、

目標達成に向けた行動を促す 学校設定科目を設置

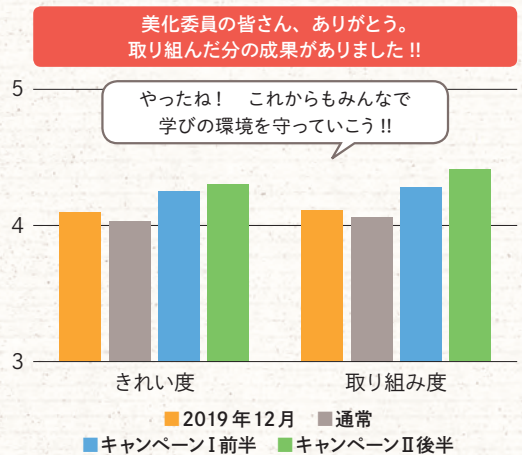
を続ければ、生徒は必ず変わるとい
う確信を持ちました」(市原先生)

学校設定科目「ライフスキルⅠ」の設置だ。例えば、人権に関する講演を行い、生徒に講演の感想やいじめの実体験について無記名の作文を書かせて、それをクラス内で共有する。いじめを受けたり見たりしたクラスメートの体験を知ったことで、「このクラスでは、いじめを起こさせない」という共通意識が生まれたという。

「ライフスキルⅠ」では、社会スキルアンケートを用いて年3回、自己評価を実施し(図3)、その結果は、行動目標の達成状況を評価するデータの1つとして、教師が注意深く推移を観察している。

2・3年次には、「ライフスキルⅡ・Ⅲ」を選択科目として設置した。1年次の行動評価表の結果に基づき、個別指導が効果的であると判断された生徒に履修を推奨し、同意した生徒には通級による指導を行う。20年度の2年生では、8人が「ライフスキルⅡ」を履修している。

図4 「礼節敬愛 そうじキャンペーン」の1学期の結果



20年度1学期の「そうじキャンペーン」の成果を示したグラフ(掲示板に掲示)。19年度から徐々に成果が出ているのが分かる。

*学校資料を基に編集部で作成。

「挨拶」「そうじ」などのキャンペーンも、生徒に目標に応じた行動を促す環境整備の1つだ。キャンペーン期間を通じて行動目標を改めて周知し、集中的に改善を図る。キャンペーン終了後には、キャンペーンの結果(図4)を示した掲示物を貼ったり、集会で報告したりして、生徒に必ず成果を伝えるようにしている。

「単に褒めるだけではなく、具体的な根拠を示して生徒を褒めるようにしています。それにより、自分の行動の意義を実感し、『次はここまで到達したい』と目標を引き上げ、よりポジティブな行動を起こせるようになります。それはまさに、『ス

学校全体が落ち着き、 生徒も教師も前向きに

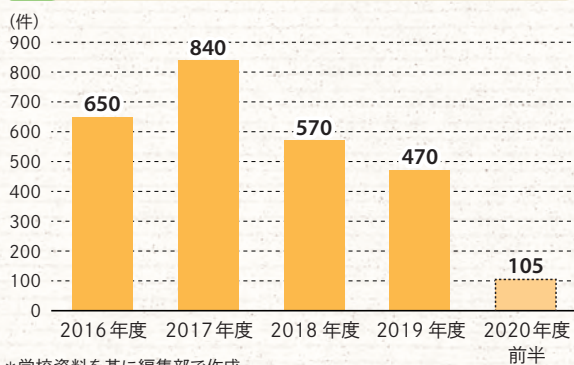
クールワイドPBS』で重要視されていることの1つです」(市原先生)

19年度の1年生への取り組みの結果、生徒と教師の双方に大きな変化が表れた。生徒には、例年の1年生に比べて、前向きな姿勢で授業を受けて、集会や掃除などでも落ち着いて行動する姿が見られた。その取り組みの好影響は全校に広がり、遅刻者総数も減少している(図5)。奥平博徳校長は、次のように述べる。

「学校全体の雰囲気明るくなり、活性化してきています。本校で多数を占める学力中位層の生徒が、前向きな気持ちで学校生活に臨めるようになったからだと思います。『ライフスキルⅠ』では自己分析をする機会が多いため、自分を客観的に見る力も育っていると感じます。その結果、学校が自分にとって意味のある場所だと実感して行動することができています。『礼節敬愛の取り組み』は当初、教育相談部が主導していたが、その重要性は徐々に全教師に広がった。

「礼節敬愛の取り組み」は当初、教育相談部が主導していたが、その重要性は徐々に全教師に広がった。

図5 全学年の遅刻者数の年間推移



*学校資料を基に編集部で作成。

保健体育科の教師が、集会時の指導につながる整列の仕方を授業に取り入れるなど、各教師が生徒の行動を変えようとする取り組みが試みられている。19年度に1年生を担当した横田雅人先生は、次のように振り返る。

「丁寧に掃除に取り組む様子など、一つひとつの行動を言葉にして褒めると、生徒はうれしそうに表情をしましたが、さらによい行動をするようになりました。そうした生徒の姿から、教師は自分の指導に自信が持てるようになり、授業やホームルームなどの様々な場面で、行動目標を意識した指導を行うようになりました」

個別の評価を充実させ、一人ひとりの意識を高める。生徒と教師の意識と行動が相乗的に変化していく一方で、課題も明らかとなる。教育相談部での検討や職員研修での協議の結果、20年度は取り組みの枠組みを再編した。大きな変更点は、評価の「場面」を6つから3つに精選したことだ。(P.35図1)

「場面が6つもあるとキャンペーンの回数も増え、生徒も教師も取り組みに集中しづらかったため、全教師がかかわる『授業』『そうじ』『集会』の3つの場面に絞り、行動目標も見直しました」(市原先生)

また、19年度1年生の「基礎力診断テスト」の結果を分析すると、学力下位層においては底上げが図られていたが、学力上位層は伸び悩んでいた。そこで20年度は、教務部が中心となり、「学びの姿勢を高める授業づくり」をテーマに授業改善の研修を行っていくことにした。教務主任の成合理恵子先生は、取り組みのねらいを次のように述べる。

「授業の行動目標の1つに、『得意分野をより伸ばし、苦手分野には』挑

戦』することが挙げられています。私が担当する数学でも、上位層を伸ばし切れていないことが課題でした。基礎学力の定着と、生徒の得意分野をさらに伸ばすという2つの方向から、授業改善に取り組みます」

フィードバックの方法も見直した。19年度は、全体に向けて取り組みの成果と課題を報告したが、20年度は、行動目標の到達状況を整理した個票を作成するなど、個人に向けた評価を充実させていく。

「学校全体の雰囲気は落ち着きましたが、行動目標の達成状況には個人差があります。『先生は自分を見てくれている』という気持ちを生徒一人ひとりに持たせることは、生徒と教師の信頼関係を深め、望ましい行動を増やす上でも重要です。今後は、個別のフィードバックに力を入れ、さらに生徒の行動変容につなげていきます」(横田先生)

改善された今をあたり前とせず、生徒を褒め続けたい

20年度は、新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業を経て、通常登校再開と同時に「礼節敬愛の取り組み」を実施している。期待するのは、2・3年生が昨年1年間で見せた行動を今年度も継続し、1年生はそれを手本として学ぶことで、学校全体が成長していくことだ。

学校が抱えていた問題が解決されていく中で、この状況をあたり前として捉えないように留意していると、市原先生は語る。

「生徒への期待が高まるのはよいことですが、目標のハードルを上げ過ぎると、生徒を褒める機会が減ったり、『昨年の生徒はできたのに』と捉えて、生徒に不満を抱いたりしかねません。多くの生徒がたくさん褒められる環境づくりを続け、ポジティブな行動支援をしていきたいと思えます」

教師の異動があっても取り組みを継続できる体制づくりも課題だが、教師に前向きな気持ちをもたらしてくれる取り組みであるという点は、継承のしやすさにつながっていると、市原先生は語る。

「生徒を叱るのではなく、褒めて前向きにする指導に、全教師がやりがいを感じています。教師も指導を楽しみながら、生徒が笑顔で成長できる環境を提供し続けていきます」